

香川大学教育学部附属高松小学校の教育

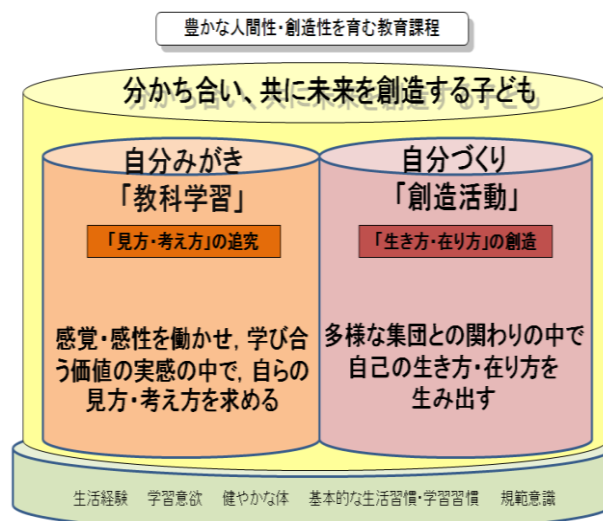
1 学校教育目標 ・豊かな心 ・考える力 ・たくましい心 ・たくましい体

2 研究開発課題【平成25年度文部科学省研究開発学校指定】

豊かな人間性と創造性を育むために、道徳・特別活動・総合的な学習の時間を統合した新領域「創造活動」を創設し、多様な集団や価値観の中で、「分かち合い、共に未来を創造する子ども」に向けた教育課程に関する研究開発

3 研究の概要

全学年に新領域「創造活動」を新設する。この「創造活動」では、多様な集団や価値観を介して自らの生き方・在り方を生み出す自分づくりの学習を目指す。また、自らの見方・考え方を求め続ける「教科学習」は、外国語科も含めた9教科とする。この2領域が往還的に働くカリキュラムを構想し、豊かな人間性や創造性を育むことを目指す。



4 研究テーマ

分かち合い、共に未来を創造する子どもの育成 ～新領域「創造活動」を核とした 2領域によるカリキュラムの構想～

「分かち合い」とは、学習の主体としての子どもが自らをメタ認知しながら、共に生きていく他者と互いの見方・考え方を理解し認め合う中で、学ぶ価値を実感することである。それは、様々な困難な状況であってもそれらを多様な価値観をもつ他者と関わりながら乗り越えていくことで、豊かな人間性や創造性が育まれることでもある。換言すれば、なりたい自分を心に描き自分にとっての課題を認識し、試行錯誤しながら積極的に課題を解決していこうとする中で自信をもち、主体的に社会に関わろうとする子どもであり、将来に対して夢や希望をもっている子どもである。また、ここでいう「未来」とは、これから訪れる時を意味するだけでなく、現在よりもよりよい将来を意味する。つまり、未来とは、子どもたちが今現在の中でもつ見方・考え方を多様な価値観をもつ人々との関わりによって、それらをよりよくしていくことであり、自己肯定感を高め、生き方・在り方を創造していくことである。そこで、本教育課程編成において、以下のような仮説を立てた。

【研究仮説】

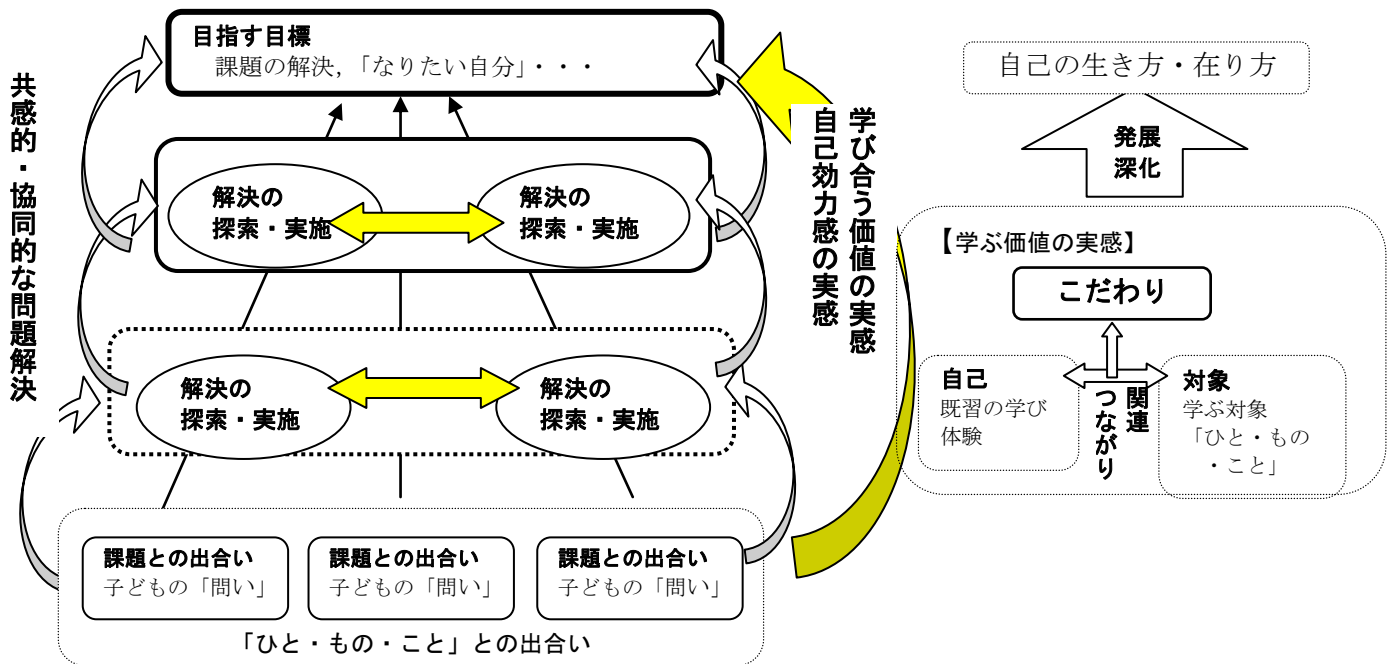
- ① 自分みがきの教科学習と自分づくりの創造活動の2領域からなるカリキュラムの構想により、豊かな人間性や創造性を育むことができる。
- ② 「教科学習」は、仲間と共に問題を解決していくことにより、学び合う必要感や学ぶ価値を実感しながら、自分の「ひと・もの・こと」に対する見方・考え方を求めていくことが重要である。
- ③ 「創造活動」は、多様な関わりを通して、学び合うことの意味を見出し、自ら学び進んで「ひと・もの・こと」へ働きかけようとする意欲や態度を育てることが重要である。

5 研究の重点

(1) 2領域で育む分かち合う子どもの姿

本校の研究の特徴は、子ども中心の教育である。子どもが自ら問いかけ追究していくところに、主体的な学習があると考えられてきた。つまり、子ども自らが主体的・創造的に自らを高めていく自己教育力をもった子どもを育むための教育の在り方を模索してきたといえる。そして、子どもたちが積極的に対象に働きかけ、自らを高めていく上で、よりよい見方・考え方を求め続ける子どもを目指してきた。特に、仲間との豊かな関わりが不可欠であり、学び合う価値を実感する上で、多様な関わりが欠かせない。様々な問題を解決していく過程では、多様な価値観をもつ仲間と互いの見方・考え方を認め合い理解し合うことによって、質の高い学習へと深まるのである。

そこで、問題解決に向かう過程における分かち合う子どもの姿について以下のように考える。



子どもは、「ひと・もの・こと」との様々な出会いの中で、素朴な思いや願い（問い）をもつ。こどももつ問いは、子どもの内なる思いから湧き上がるものである。（外発的動機が多様な体験の積み重ねによって内発的動機へと高められる。）ここで、互いの問いを語り合うことによって、目的意識を共有する。また、その後の解決の探索・実施が進む中で、互いの見方・考え方を認め合い理解し合うことによって、よりよい解決の方法を見出すのである。

問題を解決していく過程で、他者と豊かな関わりをもつことを通して、ずれを感じたり、自分の見方・考え方を見つめ直したりする。分かち合う過程では、目的を達成することだけでなく、そのプロセスそのものに意味があり、主体的に活動を創造していくことで、学ぶ価値を実感し、自己効力感が生まれる。したがって、教師は子どもたちが主体的に学ぶことのできる状況をつくることが重要になる。そこでは、子どもたちの欲求・自律性・関係の要素を織り込んだ状況づくりが大切になるといえるだろう。主体的な学習は、解決しようとする事柄に夢中になって取り組み、必要感のある関わりが生まれるからこそ、そこにはともに学ぶ仲間の思いや願いを受け止め、共感することが不可欠になるのである。そのような切実な思いや願いが促されたとき、子どもたちは自分と学ぶ対象との接点を見出し、一人一人が心の内にこだわりをもつようになる。つまり、自ら問いを生み出し、自ら学ぼうとする。そして、学ぶ価値の実感を繰り返しながら、自らの生き方・在り方を見つめようと考えられる。

(2) 自分みがきの教科学習

【自分みがきの教科学習でのねらい】

学び合う必要感や価値を実感しながら、よりよい見方・考え方を自ら求めることができる。

教科学習では、自らの資質・能力を高めるために必要な「ひと・もの・こと」に対する見方・考え方をつかむ自分みがきの領域として位置付ける。そして、ここでいうみがきとは、自分だけの見方・考え方が伸びていくものではなく、共に学ぶ仲間を理解し、互いの見方・考え方を吟味・整理しながら共によりよい学習をつくり上げていくことである。

(3) 自分づくりの創造活動

【「自分づくり」の創造活動のねらい】

多様な価値観や背景をもつ集団の中で、互いの見方・考え方を理解し認め合いながら、実社会・実生活での様々な問題を解決していくことで、それまでの自らの生き方・在り方を深化させ、自分自身を成長させていこうとする。

期待する学びの姿

- 自分自身への肯定的な理解をし、今後の成長に向けて夢を描くこと
- 多様な価値観をもつ他者の見方・考え方、立場を理解できること
- 自分と向き合い、積極的に社会に働きかけること
- 目指す目標に向かうための過程での様々な思いを分かち合うこと

創造活動では、多様な価値観の中で自らが求める姿を子ども自身がもち、それぞれの立場で仲間とともに解決していく過程で、楽しさも苦しさも分かち合って活動していくことができる子どもを育てたいと考える。そのために、多様な集団で学び合い高め合う場を保障し、自己の生き方・在り方を生み出し、自ら学ぼうとする子どもの姿を目指す。そこで、創造活動では以下のことをねらう。

(3) 本年度の努力点

本校で目指す子どもの姿を明確にするとともに、教科学習と創造活動からなる教育課程を編成し、それぞれの領域での研究内容や方法について検討する。研究仮説を設定し実践を進める。

- ・ 研究構想案を作成し、「分かち合い、共に未来を創造する子ども」の姿を明確にする。
- ・ 各領域における理論構築を行うとともに、実践を通して研究内容や方法における課題を分析し、研究内容や方法を検討することで、附属高松小プランの方向性を探る。
- ・ 外部評価として、運営指導委員会及び学校評議委員会での研究協議により、教育課程の課題を検討するとともに、研究内容や方法についての方向性を明らかにする。

① 「分かち合い、共に未来を創造する子ども」の姿を明確化
長期的に子どもを見る視点を見出し、指導と評価に生かす。

② 教科学習における指導と評価の在り方

創造活動へとつながる「ひと・もの・こと」に対する見方・考え方を分析し、学習内容を精選すると共に、それらの指導と評価の在り方を探る。

③ 新領域「創造活動」における指導と評価の在り方

多様な集団との関わりによって自己の生き方・在り方を生み出す指導と評価の在り方を検討すると共に、子どもたちが主体的に取り組むことのできる活動の工夫について探る。